

2011年01月31日

邑楽町風の子保育園公演

年末から更新しないまま早1月も最終日になってしまいました。

今年は子どもの保育に携わる人々の‘全国保育団体合同研究集会’という研究会が、群馬県で開催される年なのだそうです。

その「プレ合研」企画として昨年から県内各地で文化芸術に関わる催しも行われ、群馬中芸も「イーハトーヴォものがたりパート4 やまなし／雪渡り」を昨年5月に群馬社会福祉大学の体育館で上演いたしました。

今年は、そのプレ合研企画として二度目の舞台公演を、1月26日に邑楽(おうら)町風の子保育園のホールで「パナンペ～」を上演させていただきました。

いつも劇団活動を支えてくださる大泉町や邑楽町の保育園の皆さんが、子どもたちと保育士さんに向けて2回の舞台公演に呼んでくださいました。

午前中の保育園児の回と、子ども連れも多い保育士さん達の夜の回と、お客さんの年齢層は違いましたが、どちらも楽しく和やかで、温かな雰囲気の中で上演することが出来ました。

終演後には、子どもたちから手作りのお菓子やチョコレートのプレゼントを頂きました。

劇団員は午前中と夜の公演の間のなが～い時間を、こたつのぽかぽかとした部屋でゆっくりと休憩をとるうちに、いつしか睡魔が訪れて・・・贅沢にも仕事にたっぷりと午睡の時間をとることができました。温かい控室のなんとありがたかったことでしょう。長丁場の一日には助かる充電時間になりました。

劇団を迎えてくださる皆さんのあたたかなご好意と、公演の機会をいただくことにいつも感謝しております。

大泉町西・北・南保育園、風の子保育園、佐野市風の子保育園、館林市ももの木保育園、太田市ぽぶら保育園のみなさん、インフルエンザで来られなかったポッポ保育園のみなさん、ありがとうございました。

子どもを取り巻く保育の現場が今、変貌させられていると聞きます。

日本政府の進める幼稚園・保育園を一体化してこども園にするという方針(「幼・保一体化」)は、国が公的支援の責任を事実上放棄して、地方自治体や民間任せにして合理化を推し進めようとする背景がひとつにはあるといます。その影響を受け、教育現場の基本的なしくみ自体を変えざるを得ない状況がつくられようとしています。

日々の保育の中で起こる問題以外にも、新たな問題に向き合わざるをえない困難な状況の中に保育士は立たされているのだそうです。

それでも希望を見い出しながら、子どもを見守り続けている教育者のみなさんのご苦勞を思わないわけにはいきません。

2011年02月01日

「木鶏の会」TPP問題について

1月30日は未来スタジオで木鶏の会という集まりがありました。

「木鶏(もっけい、もくけい)の会」は、中国の故事・鬪鶏に由来する木彫りの鶏のように、あらゆる状況下においてもたじろぐことなく、自分の拠り所とするものをしっかりと確立し、お互いの自由意思の下、知的好奇心を共有し合う文化交流の場として発足した、小さな会員制の集まりです。

そして会の名の由来はもう一つの意味が込められています。

劇団の創立に深く関り、創造活動の精神的支柱であった作家、演出の故・風見鶏介先生と、故・木村次郎先生の名前から名づけられています。

風見先生、木村先生は優れた見識者であり、その哲学に教えを請いたいと思う多くの人々や仲間に慕われた文化人でした。戦後、日本社会を文化的に復興させる為、たゆまぬ努力を続けて来た、日本中有名無名に存在する多くの尽力者達のひとりなのだと思います。

お二人のことをこのようなブログの中でご紹介するには、とても力が足りません。

ですが、半世紀近く続いてきた群馬中芸の歴史の一端を、これからも機会あるごとに少しでもお伝えできればと思っています。

さて、木鶏の会のことに戻ります。

毎回会員の中から‘話題提供者’を決め、テーマとなる話題を話していただき、参会者同士で意見交換しあうことを基本にして、ときに音楽会やヨーガ教室など、それぞれの職業や趣味を生かした様々な内容で、年に2~4回程度開催してきました。2004年の秋に始まった会は、今年で7年目になります。

これまで会のメンバーが順繰りに話題提供者になって、日常に結びついた等身大の主題を発表する場になっていましたが、会員間をほぼ一巡した後、なかなか2度、3度目の話題提供者を選定することが難しくなってきました。相談の結果、昨年で第一次としての木鶏の会を閉めることになりました。

その後、会の存続を望む声を受けて、今年から新たに第二次がスタートしました。

会員の内外を問わず、時事問題に即したテーマで、今これを知りたい、聞きたいと思うことや、ユニークなライフワークを続けている人など、お話を聞きたいと思う方に講師になっていただき、文化的に交流し合う例会を、今後もすすめていくことになりました。

1月30日に新たに再スタートした例会は、「TPP(環太平洋連携協定)と、日本の食料といのち」というテーマで、群馬県‘農民連’副会長の下田嘉丈さんという方にお話をさせていただきました。

下田さんは未来スタジオのある富士見町で長年農業を営まれています。現在も2000頭以上の豚を飼育する畜産農家として、次世代のご家族が継がれているそうです。下田さんは旧富士見村の村会議員を務め、実際の経験を踏まえた立場から、日本の農業が日本人にとってかけがえのない豊かな精神をはぐくんできたことを確信し、TPP問題についても積極的に発言され、多方面で活躍されています。

そのような多忙な中、木鶏の会の例会へおいでくださいました。

下田さんはとても穏やかな語り口で、丁寧で分かりやすくお話してくださいました。

楽天的な人柄らしく、深刻な問題の中に面白くて愉快的話題をたくさん交えて、終始楽しい雰囲気の例会でした。

日本の農業が危機的な状況に陥っているという事実を、多くの人知らない、知ろうとしない、知らされていないということは、まるで真綿で首を絞められているのと同じなのだとのこと。

農業の担い手は大半が65歳以上であり、10年20年後にはほとんどの零細農家は消滅してしまうと予想されていること。このままでは、毎日の食卓に国産の野菜や肉で作られた食品が並ばなくなり、食料危機が起こることになる。

おおまかにいえば、人間の体は食べものから作られている。日本の食料自給率が40%ということは、私は4割分しか日本人といえないのでは？これから自給率ももっと下がったら、多国籍人になるということ？

政府与党の発想は、日本の農家がこれ以上減らないよう支援するのではなく、足りない食料は外国から安く仕入れればいいという市場原理主義の視点でしか見ていない。安ければいいという発想では食の安全を守ること出来ないだろう。

TPP参加は国内GDPのほとんどを占める工業で利益を得るために、農業を切り捨てようとする動きなのだとのこと。JA(全農)も強くこれには反対している。事実を多くの人に伝えなければならない。

下田さんは、日本の土壌の豊かさは他に類を見ないといいます。耕されず荒れた土地でも、たちまち雑草が丈高く生い茂るのは、土壌が水分をたくさん含んでいるからなのだそうです。大陸では植物さえ生えず、砂漠化してしまうところが多いそうです。そういった土地はたちまち山火事が広がってしまうので、オーストラリアでは野外での火の扱いを非常に厳しく取り締まっているのだそうです。

下田さんは仏教の中にも、人間は土から離れて生きることは出来ないのだということを説いている経文を見つけ、深く共感しているそうです。地産地消、身土不二、食の生産者と消費者が連携するスローフードにも共通する、今、多くの人共生の為にその価値を見直し始めている食の大切さについて、長年の経験に即した実感とともに強く確信しているというお話でした。

参会者の質疑応答も、とても有意義に行われました。

農民運動全国連合会(農民連)発行の冊子が参考資料として販売されました。一部500円で販売しているそうです。

ご希望の方は農民連へどうぞ。

<http://www.nouminren.ne.jp/> TEL03(3590)6759

群馬県農民連 TEL027(288)8633

そして、例会の終了後。久しぶりに再会したお二方。

台本作者、演出の中村欽一さんと詩人の久保田穰さんです。

木鶏の会をつくり、内容についての世話係と司会進行を担っておられる方々です。





この日もとても冷え込んだ寒い日でした。



久保田穰さん



中村欽一さん

お互いの体調を気遣いながら、しばらく歓談されていました。
本日は中村さんお手製のおしるこが振る舞われました。原材料は全部国産だとおっしゃっていました。

2011年02月02日 水道管凍結で洪水

本日2月2日は、朝から日も良く照り、寒さゆるむ小春日和でした。
が、———出勤した劇団員が駐車場で見たものはスタジオの中から溢れ出てくる水溜まり。
一体なぜ建物の中からそよそよと水が小川となって流れ出てくるのか
元をたどっていくと、

玄関ロビーからホール、ホールから下手楽屋、あらら楽屋は水浸し！！
隣の小道具部屋やボイラー室へも支流は続いていました。

この小川の源泉は楽屋のトイレから湧き出していました！

壁とトイレタンクを結ぶ管が凍結し、破裂したのか接合部が外れてしまったのか、
その部分からジャボジャボ水が噴き出していました！

昨夜それほど冷え込んだのか、どうして今まで破裂しなかったのか全く不可思議なまま、
集まれる者たち総出で、すぐさま事後処理にとりかかりました。

水を掻きだしたり、濡れてしまった舞台の大道具などを避難させたり、
モップや雑巾でスタジオ中を拭きまわりました。



この管から水が噴き出した！

幸いにも午前中はぼかぼか陽気だったので、たいがいものは午後までに乾いてくれました。
連日空気が乾燥していたし、なんだかちょうど良いおしめりになったのかと思うほどでした。

いやあ、天候はあなどれません。予想だにしない事態が突然起こります。
昨夜一晩中噴き出し続けてスタジオに川を作っていた細い水道管があったとは！
楽屋が完全に乾くのは数日かかりそうです。

普段使用していない西北の隅にあったトイレが凍結するとは、思いもよりませんでした。



カーペット敷きの床もびっしょり濡れました！
水道管の凍結には気をつけましょう！

2011年03月13日
3月11日 大地震

群馬県富士見町赤城山の未来スタジオも大きく揺れました。

最初はすぐに治まるだろうと思っていた揺れがどんどん大きくなり、建物がきしむ物凄いな音がし始め、仕事の手を止めてやり過ごすことさえ出来なくなるほど揺れが大きくなりました。

足元から大きく揺さぶられる振動は、一面ガラス張りの窓やコンクリで固めている床が、薄く柔らかな膜になったように見えるほど、ぐらぐらとゆらぎました。

その日劇団員は各自出かけていて、事務所に控えていた者二人で寄り合って、ロビーにしゃがみ込んでなすすべなく第一振をやり過ごすしかありませんでした。

それから倒れそうな物や割れやすいものを床に下ろしたり、非難させたりしました。

その後も何度も大きな余震が続きましたが、二日後の現在も細かな揺れが続いているので驚くばかりです。

スタジオ内を巡回して見ると、

二階リハーサル室の本棚の本が崩れ落ちたり、照明器具が傾いたり、大道具の板が何枚も将棋倒しになっていましたが、幸い建物に大きな被害はなかったようです。

揺れが来るたびにシーリングの吊り照明が一様にぶらぶら揺れているのを見上げると、さすがに恐ろしく感じました。

富士見町の赤城山一帯は地震直後から夜の1時頃まで停電していました。被害甚大な被災地をおもえば、復旧は早い方でした。

時間が経つにつれ、この地震被害の大きさがどんどん明らかになっています。

大津波や二次災害が各地を襲うニュース映像は、現実のこととして受け止める感覚が麻痺しそうになります。

そして福島原発の放射能漏れは、地震国である日本が原子力発電に頼る電力供給システムそのものの問題性と危険性を突きつけることになりました。

世界中でその影響を心配するコラムなどがネット発信されているそうです。

東電は足りなくなる電力供給のためにこれから各地域で「輪番停電」を実施すると発表したそうです。

さほど被害を受けなかった富士見町や前橋市街地の住民として、支援につながることには協力してゆきたいと思います。

それにしても、深刻な被災状況が続く地域のみなさんのすこしでも多くの命が助かることを願うばかりです。

2011年03月22日

地震のあと

東日本の大震災後、さまざまな影響があらゆるところへ波及し続けています。

ここ未来スタジオの本拠地富士見町赤城山は、輪番停電が始まって以来、東電の通告予定通り「計画的」に停電が行われています。グループ分けは第1グループです。

新聞にもグループ分けの実行回数が不公平ではないかとの苦情が出ていますとありますが、別グループと比べてもとりわけ第1グループで、中でも市街地から離れた郊外や山間部の地域がより多く停電が実施されています。赤城山では一日に2回停電するのは、当たり前になっています。今まで当たり前に使えていたものが使えなくなるのは不便です。

被災地では、電気以外のライフラインでさえ止まったままのところはまだ多いのですから、それを思えば小地域の不便を大きな声で言うことは出来ません。なので、小さく不満をもらします。

日頃から節電に心がけてきたスタジオです。今年中続くであろう「計画」停電とうまくつきあっていこうと思います。販売店が日中の節電で店内を暗くしているのを、初めは違和感を感じました。ですが慣れてくると、普段からのくらいの明るさでもいいのではないかと、おおくの人が感じるようになったと思います。

パチンコ店のネオンが消えたことで、見やすくなった信号機もあります。

節電はいろいろな所でもっと心掛けることが出来るのだと思います。



劇団が加盟している児童青少年演劇協同組合の事務局から、東北地域の劇団、劇場の被災状況が伝わってきます。

宮城県多賀城市の古くから劇団を支援してくれている方と連絡が取れずにいましたが、19日の土曜日に無事であることが分かりました。劇団員の一人も実家が宮城県登米市にあり、幸い家族の皆さんは無事でしたが、町のいたる所で建物などが倒壊し、片付けや復旧作業が始まっているそうです。

仙台市内でも深刻な物資不足が続いていると聞きます。

一刻も早く、被災地を優先にして必需品が行き届き、物流の流れが円滑に進むことを願っています。

そして、福島原発の状況が日本中一番の気がかりになっています。

畑の野菜、原乳、水道水、海産物

汚染されたから出荷するなどと突然言われても、それを生活基盤にしている多くの人々、消費者は、震災に追い打ちをかけて苦しめられることになってしまいました。

政府やNHK民放各局では、混乱を招かないよう非常に気をつけた発言の仕方をしています。

どれほど「ただちに健康に影響はない」、「冷静な対応を」と言われても、放射性物質が付着した食物を水でよく洗い、熱湯で茹でて食べてくださいといわれる世の中になってしまったのは、やはり異常な事態です。

原発を電気エネルギーの一つに選び推進してきた政府と東電、知らされずに便利さの為に金を払って享受してきた私たちが、これから長い時間をかけて立ち向かっていかなければならない健康と食生活に直結する問題です。

放射能と原子力について、一般市民に向けて情報を発信している「原子力資料情報室」(CNIC)によると、原子炉の燃料が落ち着いた状態で制御できるようになるには一年近くかかるそうです。

原子炉を廃炉するのは10年、原子力発電所一帯は30年近く経たなければ、安全な地帯にはならないだろうと推測しているそうです。

資料室のスタッフと、福島原発の原子炉設計に関わった後藤政志さん、田中三彦さんという方々が、原発事故直後から詳細な分析をして、原発の状況を伝えています。

原子力資料情報室の動画配信

3月12日 原発事故後の緊急記者会見

<http://www.ustream.tv/recorded/13269582>

3月18日 事故状況の推察(同時通訳付き)

<http://www.ustream.tv/recorded/13410573>

日本科学者会議(JSA)福岡支部では被ばくを防ぐための『原発事故—そのときあなたはどうか! ?』というブックレットのPDFデータを無料公開しています。プリントして綴じておくと、いざという時のガイドブックになります。→ <http://jsa-t.jp/local/fukuoka/>

原子力反対派も推進派も関係なく関わる問題として、「原子の火」について知ることが大切なのではないのでしょうか。

次世代を生きる子どもたちを守るために

2011年04月26日

さよなら たーちゃん、ちいちゃん

新緑に包まれつつある4月、二匹の猫たちとの別れがありました。

厳しい寒さの冬をのり越え、春の暖かい日には草の上でうれしそうに日向ぼっこをしていました。

大地震のあった頃から少しずつ食欲をなくし、やがてちいちゃんの姿が見えなくなりました。

ずっと探していましたが、つい数日前に長引く余震で倉庫の棚が崩れていることに気づき、その棚の下にちいちゃんの姿を見つけました。

やっと埋葬が出来ました。もっと早く気がついてあげられたらよかったです。

そして、後を追うように、体格も良くいつも元気だった一ちゃんも力尽きてしまいました。
動物病院で、お腹におおきな腫瘍があるとわかった数日後でした。

外で暮らしている生き物は空気中の病原菌やウイルスを、けんかなどでもらってしまうことが多く、寿命も短いのです。

二匹は5年間生きました。
人懐っこくて、心やさしい愉快的彼女たちでした。

いままでありがとう。



2011年11月01日
持谷靖子さんの語りを聞きに六合(くに)へ

「六合の文化を守る会」の山本茂さんから民話の語りを聞く会のご案内をいただきました。

『民話の心と語りについて』～講演と語り 持谷靖子先生～

六合入山 宿‘くじら屋’にて
10月28日(金) 午前10時から

この日は群馬県民の日で、公的機関や学校はお休みになります。
忙しい大人はうっかりすると休日だということも忘れがちですが、子ども達には嬉しい休日なのでしょう。

山本さんのお誘いを受け、群馬県北西部・吾妻郡中之条町の六合へ、劇団員3名で出かけました。
劇団の新作芝居「ゆめみこぞう」の元になった昔話の生まれたところですから、お話が聞けるのを楽しみに出かけました。



雲一つない秋空。

風も吹かず、とても気持ちのいい日でした。

向かったところは京塚温泉のくじら屋という旅館。
劇団の本拠地未来スタジオから車で向かうこと2時間
少しで到着しました。



木造りの館内にはくじらのオブジェや写真がたくさん飾
ってありました。

会場となった大広間には薪ストーブがあり、はや薪がく
べられて赤々と燃えていました。

もうそんな季節かと思いましたが、高地はやはり気温が低く、ストーブの火があってちょうどいい暖かさでした。

テーブルの一角に民話の資料が展示されていました。

民話の‘原話集’など、ガリ版の手製資料にあたたかさを感じました。

今日の会を開いた山本茂さんです。



学校の先生として現役の頃から、多くの子どもたちに慕われていた
だろう優しいお人柄の先生です。

今日は利根郡みなかみ町の猿ヶ京温泉の旅館のおかみで、民話
を長年語り伝えている持谷靖子さんという方のお話を初めて聞くこ
とが出来ました。

何も知らずにただ楽しみに出かけてきたのですが、持谷さんの語り
がはじまり耳を傾けているうちに、みるみるお話の中に引き込まれ
ていきました。



持谷さんは伏し目がちに、記憶を辿るようにゆっくりと穏やかに語っていました。

普段、お腹の底から出す発声の仕方に慣れている者にとってはとても静かな語る声でした。

猿ヶ京地域と旧六合村と、場所は違えど民話の題材になるものはどの地域でも共通しているようです。

また民話にも語る時季があるのだそうです。

そのなかでも特に米にまつわる話はたくさん伝えられています。

昔の農村に住む人々の日常食は稗や粟などの雑穀でした。米は客人をもてなすための貴重なもので、家の者は特別な時にしか口にすることができなかったそうです。

白米の白さに慣れぬ猫が、餌とわからずにやおんと鳴いて行ってしまうので、お米のことを「にやおん」と呼ぶ地域もあるそうです。

時に可笑しい笑い話になったり、あるいは悲しみを込めて、米について語られてきたようです。

また群馬は古くから養蚕が盛んでしたから、蚕や桑にまつわる昔話もたくさん残っているそうです。

継母に捨てられてしまうおきぬという娘が、親切にしてくれたおじいさんとおばあさんに、蚕となって恩返りする「おきぬさま」。

子どものころから蚕が大好きだった者同士が夫婦になり、やってはいけないとされていた蚕の飼育環境を偶然つくってしまったことで、かえって質のいい繭になり、養蚕が栄えていったことを伝える「蚕女(かいこおんな) いと」。

「おきぬさま」を語ると、どの人もみないちだんと話に聞き入り、集中した雰囲気になるのですと持谷さんはいいます。

日本人の心の深いところで、蚕を大切に育ててきた精神性が息づいていることを感じるそうです。

おくにことばで染み入るように語られる「むかし」はどれも含蓄のあるものばかりでした。

とても良質な民族文化の講義を受けているような、思いがけず充実した民話を聞く会でした。

会場に集まった人の中にも自分自身でも語りをする人が多く参加していました。

持谷さんは猿ヶ京ホテルという温泉宿で、宿泊に訪れたお客さんに民話を語り続けているそうです。

今では民話の本の編集や、語り部の先生として大人から子どもたちまで、むかしかたりを伝えていらっしゃるそうです。

「むかし むかし あるげだあ あるところに おじいとおばあが あるげだあ ……」(六合入山地区のむかしより)

どの地域でも、身近なお年寄りから「むかし」は聞くことができるのかもしれませんが。

そういう時間を持つことも大切なのだと感じました。



豊かな「むかし」で心が充満した午後の帰路。



宿の飼いヤギさんにも別れを告げました。



その小屋には「きりん」の家と書いてありました。
うーむ。

さてもう一つ、劇団員はある石像を探しに、六合を巡りました。

劇団の座付作者の中村欽一さんから、昔六合村で見かけた石の母子像がとても印象深かったという話を以前から聞いていました。

村中に多く点在する夫婦像の道祖神ではなく、母子像の形をしていて、赤子を抱く母親の豊満な姿がとても異質な雰囲気だったそうです。鬼子母神像なのかもしれないが、何かとても気になる像だったそうです。

その話を聞いたたびに、その母子像を実際に見てみたいと思っていました。

たいていの道祖神は観光案内看板に写真付きで載っているのですが、新しく出来た観光パンフレットにもそれらしき写真はのっていませんでした。

‘暮坂峠’へと向かう上り坂の入り口にあったと聞いていたので、確かこの辺りのはずと車を止め、それぞれ探し回れどもなかなか見つかりません。

立派な観音様などは、通りに面して立っています。



今日のメンバーには以前中村さんと一緒にその像を見たことのある人もいましたが、道路が新しくなって道筋が変わってしまい、記憶もおぼつかない様子。

半分諦めかけた時、先ほどの観音様の後ろへと続く細い道の上に、通りを背にするようにぽつんと離れて立っている石仏をまじまじと見直すと、話に聞いていた特徴ととても似ていることに気がつきました。



母が子を抱いている姿。



ああ、これだったんだ。
やっと見つけました。

母子とも手編みの毛糸帽を被り、はんてんや厚い布で体をぐるぐる巻きにされていて全体の姿はわかりませんが、この像に間違いありません。
顔立ちは観音様のようです。



子どもは着物を着ているようです。下の方をめくってみると、コード線や針金でぐるぐると縛られていて、それも話に聞いていた通りでした。

その像は首や肩のあたりから下へ向かって割れた跡があり、針金で括られているとのこと。

一度は壊れた像をくくり直し、今では厚い布で体を覆って、ひっそりと祀られてきたように見えます。親子が寒くないようにあたたかい着物を何枚も掛けて守られているのでしょうか。

昔の農村では飢饉などでやむを得ず胎児の間引きをすることがあったと聞きます。

また、育たずに死んでしまう幼ない子どももいました。

そういう水子の霊を供養するためにつくられた鬼子母神なのかも知れないと、推察することも出来ます。母子像には小さな賽銭箱も置かれていて、今でも六合の人々が大切にしているのは確かなようです。

きっとこれも村のお年寄りに尋ねてみれば、どなたかご存じかも知れません。

石像ひとつとってもミステリアスで、まだまだ民話の生まれた地は奥が深いです。

「いちがぼーんとさけもうした」

山本茂さんからのご紹介

『第14回民話フェスティバル in 上田』

2011年 11月 13日 塩田の里交流館「とっこ館」にて

語り・朗読・紙芝居など

テーマ「天狗」

問合せ 実行委員会事務局0268-38-5229

=====

六合の旅追記:2011年11月14日

↑の民話フェスティバルに参加し、再会した山本茂さんに六合の母子像のことを尋ねた劇団員がいました。あの母子像は「子安地蔵」という神様なのだそうです。

集落の地名・生須(なます)がついて生須子安地蔵と呼ばれている地蔵尊だということがわかりました。

子どもが授かると、安産を祈願するために出産用の帯で子どもの防寒着などを地蔵様に巻きつけてしっかりと縛り、無事の出産を祈るのだそうです。

村の女性たちの願いがこもった着ぶくれの神さまだったのです。

子安地蔵は旧六合村の各集落ごとに存在しているそうです。

まだいくつもどこかにひっそりと佇んでいるのを想像するとわくわくします。

地蔵様を探しに六合をまた訪れたいと思いました。

2011年11月16日
放射線数値を測る

富士見町赤城山は前橋市の中でも放射線数値が高いところです。

前橋のモニタリングポストは市街地の地上21メートルの空間で測っているので、公式発表の平均数値0.03は地表付近の数値を知りたいときには参考になりませんし、町村合併した旧勢多郡地域は赤城山山麓に広範囲に位置しているため、一様にくることは元々出来ません。

本日(11月15日)突然放射線測定器が借りられることになり、数時間の約束で借りてきました。

日本共産党前橋地区委員会が測定器を5台購入し、無料で貸し出しているそうです。それを借りていた商工会から数時間だけお借りしました。

非営利に働く政党として財政的には厳しい中、政党の中ではいち早く地域住民に情報を提供するため、費用を捻出して購入し、貸し出しを始めています。

測定器も各国メーカーたくさんの種類があるそうですが、借りてきたものは福島原発事故後の日本で比較的低線量な地域の土壌を調べるのに適しているという日本のHORIBA社製「環境放射線モニタ PA-1000 Radi(ラディ)」という機器です。

メーカー価格は12万円以上するそうです。

なんて高額なんだろうと庶民ならだれでも思います！

朝日新聞「プロメテウスの罠」という原発連載記事によると、東京電力から支払われた第一次損害賠償金100万円を受けた福島県浪江町の人々が測定器を手に入れるために受けた金額から20万円をあてて購入したというではありませんか。

.....

せめて被害を受けた方々には無償で東電が提供するべきだと思います。



ネットで知りましたが、この機械はガンマ線を正確に測ることが出来る機種だそうです。

放射性セシウムはベータ線を出しますが、放射後は変化してガンマ線を出す物質に変わります。

ガンマ線を測れば相対してセシウムの放射線量値が分かるということだそうです。

電源を入れるとピッと鳴ってからカウントダウンが始まり、35秒後に測定が出来るようになります。

測定器は同じ所から1分間は動かさないで測定します。そうで

ないと、数値が正確に測れないそうです。

測りたい場所の地表と、その地上50センチ～1メートル付近も同様に測って線量を比較しました。

前橋市街地は地上1メートル付近は0.066マイクロシーベルト毎時(μ Sv/h)でした。

発表されている前橋モニタリングポストの数値の2倍です。
富士見町未来スタジオの庭は0.09~0.1マイクロシーベルト。
やはり少し高いです。

スタジオ周辺も平均してそのくらいでしたが、ニュースなどで報道されて気がかりだった、突出して高い数値の出る箇所、いわゆる小範囲のホットスポットになりやすいのが、雨どいをつたって集積する土砂が溜まる付近だそうです。

普段は人跡未踏で葛の葉が生い茂ってしまうスタジオ西側の雨どいの排出口付近を測定すると、最高で0.845まで上がりました。

これには皆驚きました。

といの真下ではなく、数十センチ離れた土の部分でした。

測定値が0.23マイクロシーベルト以上あると、除染対象になるのだそうです。

思わぬ結果に驚くやら、かといって一体何が危険なのか判然としないから全く実感がないやら、それでいて不安にさせられる、なんとも言いようのない複雑な心境です。

1マイクロシーベルトに近い数値が身近にあったとはいえ、原発事故で故郷を追われた人々の苦しみとは比べようありません。

これからも地道に地域単位で詳細に測定し情報を共有しあっていくことが大切なのだと感じました。

